

大学生の文化的自己観とゼミ担当教員のリーダーシップ・スタイルがゼミへの態度に及ぼす影響

細谷美雪（指導：中村 真教授）

キーワード：文化的自己観、相互独立的自己観、相互協調的自己観、PM リーダーシップ理論

問題・目的

他者との関係で自己を捉える様式には文化差があり、この様式を文化的自己観と呼ぶ。高田ら(1995)によると文化的自己観とは、ある文化の中で歴史的に作り出され共有されている自己についての概念であり、個人はそれぞれ他者から分離しており、それゆえ自己は自律的で独立しているとする「相互独立的自己観」と、関係のある他者と調和することが大切で、自己は他者から明確に切り離されておらず、他者が自己の環境内に位置付けられるという「相互協調的自己観」の2つに分けられる。中島ら(2010)によると、相互協調的自己観をもつ者は内集団成員に愛着を感じ、相互独立的自己観をもつ者は内集団成員に愛着をもたない傾向があるという。

このように、他者との関係の捉え方の違いが集団内での人間関係に影響を与えるのであれば、集団を牽引するリーダーがとるリーダーシップ行動に対してフォロワーが感じる期待や満足度は、フォロワー自身の文化的自己観によって異なるのではないかと考えられる。

リーダーシップ行動と集団効果(生産性、モラル、満足度)との関係を検討したPM理論に基づく研究では、課題達成機能と集団維持機能を兼ね備えたPM型のリーダーシップ行動が集団効果を最も高め、両機能に乏しいpm型は集団効果を最も低めることが一貫して確かめられている(岩井, 1987)。そして、PM型の次に集団効果が高いタイプは状況によってPm型とpM型が入れ替わるとされる(松原, 1999)。

これらの先行研究から次の仮説が導かれる。相互協調的自己観をもつ者は、内集団成員に愛着を感じる傾向があるので、リーダーに対しても、メンバー一人一人に愛着をもって対応(配慮)することを期待するのではないかと考えられる。一方、相互独立的自己観をもつ者は、内集団成員に愛着をもたないので、リーダーに対しても、メンバーへの配慮を期待しないのではないかと考えられる。したがって、所属集団のリーダーを課題達成機能が低く、集団維持機能が高い(pM型)と認知した場合、フォロワーの集団に対する満足度やモラルは相互独立的自己観群よりも相互協調的自己観群の方が高くなると予測される。

そこで本研究では、大学生を対象に、文化的自己観および彼らの身近なリーダーであるゼミ担当教員のリーダーシップ・スタイルが、ゼミへの態度にどのような影響を及ぼすのかを先に述べた仮説を中心に検討する。

方法

江戸川大学人間心理学科の学生 201 名を対象に質問紙調査を実施した。使用した主な尺度は、(1)相互独立的-相互協調的自己観尺度(高田・大本・清家, 1995)、(2)ゼミ担当教員のPM指導行動測定尺度(三隅, 1984)、(3)課題価値測定

尺度(伊田, 2001)、(4)学校への適応感尺度(大久保, 2005)、(5)意識低下領域尺度(下山, 1995)であった。

結果

文化的自己観(相互独立的自己観群・相互協調的自己観群)とゼミ担当教員のリーダーシップ・スタイル(PM・Pm・pM・pm)を独立変数とし、①ゼミへの興味価値、②ゼミの課題・目的の存在、③ゼミの居心地の良さの感覚を従属変数とする被験者間要因による2×4の分散分析を行った。その結果、リーダーシップ・スタイルの主効果が全ての従属変数で有意であった。文化的自己観の主効果はいずれも有意でなかったが、①と②で交互作用が有意であった。いずれも、pM型における文化的自己観の単純主効果が有意であった。

考察

PM型のゼミ担当教員の元では、ゼミへの態度が一貫して高く評価された。つまり、PM型のゼミ担当教員の元では、ゼミ生がゼミに良く馴染み、その学びに対して興味を持ち、将来役立ちそうだと感じていることを意味する。これは、岩井(1987)や松原(1999)が示したPM理論に基づく研究知見と一致し、PM型のリーダーの元でのフォロワーのモラルの高さが、大学におけるゼミ担当教員とゼミ生のあいだにも認められたと言える。

また、交互作用の結果は仮説を支持するものであり、指導力が低くても、ゼミ生への配慮を多く行うpM型のゼミ担当教員の元では、ゼミ生の文化的自己観によって学習面における評価が異なることを示した。相互協調的自己観を持つゼミ生は、学びのモラルが高く、ゼミで学んでいることに知的な好奇心を持ち、将来役立つと感じる傾向がある。一方、相互独立的自己観のゼミ生は、知的な好奇心を持って、将来役立つと感じていないことを示した(図1)。

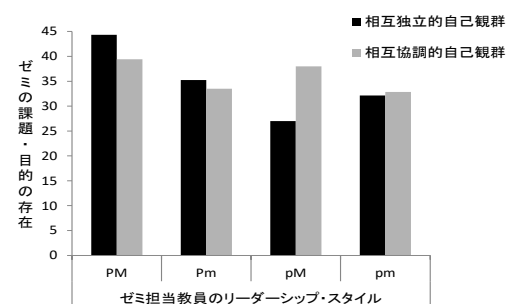


図1 大学生の文化的自己観とゼミ担当教員のリーダーシップ・スタイル別に見た「ゼミの課題・目的の存在」

このことから、ゼミ生の学業面におけるモラルを高めるために、ゼミ担当教員は、学業の指導とゼミ生個々への配慮の両面に心がける必要があると言える。ただしM機能に関しては、ゼミ生の自己観によって受け止め方や期待が異なる。したがって、状況によってはゼミ生一人一人の自己観を考慮した柔軟な働きかけが必要であると考えられる。